

## 「21春闘敗北を教訓に22春闘を全組合員と共にたたかい抜き

### JR東労組の組織強化を実現した」中央本部見解

「2022 JR総連春闘」としてたたかいをつくり出してきたJR東労組は、交渉団と職場が一体となった取り組みはもちろんのこと、統一要求・統一闘争にこだわり、ベア要求実現と定期昇給（昇給係数4）の完全実施を求め、加盟単組ならびにバス関東本部・バス東北本部・ジェイアールステーションサービス協議会の仲間の皆さんとスクラムを組み、今日までたたかいをつくり出してきた。これまで中央本部と共にたたかった全組合員の皆さんと、支えてくださったご家族の皆さんに感謝申し上げます。

3月17日に開催された第3回団体交渉において、定期昇給の完全実施という結果は確認できたものの、「ベアゼロ」という回答は、組合員の生活やコロナ禍での奮闘を顧みないものであることから、「申26号『緊急再申し入れ』」をおこない、22春闘における集大成として団体交渉に臨んだ。会社回答に納得できないという組合員の声を会社に伝え、会社は受け止めると回答し、今後の課題についても一定の労使共通認識を見出すことができたものの、要求は実現に至らなかった。

本日、全地本代表者会議を開催し、他労組が早々に妥結する中でJR東労組は、組合員の声をもとに最後までたたかい続けることができたこと、今後のたたかいに向けた展望を見出すことができたことを確認し、妥結を判断した。

22春闘は、21春闘の敗北総括が出発点だった。組合員のあきらめ感や閉塞感、仕方なさを蔓延させ、「労働組合にいても意味がない」「結局は会社の言いなりになるしかない」という“社内世論”を生み出し、職場に根付かせようとする経営姿勢に対する立ち向かい方が大きく問われた。私たちは、22春闘勝利に向けてたたかいを積み上げ、中央本部には約14,000件の意見が寄せられ、3月17日のホームページアクセス数は22万件を超えた。また、定期昇給が完全実施され「安心」「満足」といった組合員の意見もあったことから、22春闘における総括議論を丁寧におこない、次なるたたかいに活かしていかなければならない。

組合員に貫かれた思いは、会社回答以降も「昇給係数4の実施は最低限のこと」「春闘だからこそ、ベアを最後まで求めるのは当然」「去年の定昇カット分を求める」など、定期昇給の昇給係数4の実施だけで満足していたら春闘そのものが形骸化され、JR東日本で働く労働者の賃金が低額に抑えられてしまうのではないかという危機感である。今もなお、バス関東本部・バス東北本部の仲間は要求実現に向けて、組合員の声をもとに奮闘している。中央本部は、最後まで連帯してたたかうものである。

年明けから全国各地で創意工夫したたたかいは、組合員がコロナ禍に負けず多くの運動を担った。賃上げは労働組合でしか要求できないものであり、これまでのたたかいがあったからこそ、定期昇給・昇給係数4を実現することができた。昨年は、赤字とコロナ禍、世の中の情勢からベアを求めること自体も躊躇したが、22春闘では、職場においてベア要求の意義を堂々と議論することができたことは大きな前進である。その根拠は、21春闘の敗北を教訓にして、区切りをつけて再出発してきたからである。

今後のたたかいに向けて、課題も見えてきた。JR各社に見られる人事賃金制度で、JR東海は、10年間昇進しなければ翌年から定期昇給乗数4を実施しても400円しか昇給しない。さらにJR西日本では、定期昇給を実施しても等級によっては、5年目から昇給しない制度になっており、最近では、JR貨物が評価によって昇給する人事制度を導入した。会社回答（3月17日）以降、一部の職場で管理者が「昇給係数4で感謝して欲しい」「満額定昇」と社員に説明していたことがわかったが、65歳定年制が2025年から企業に義務付けられることなどを見据え、このような問題意識を23春闘に向けて議論を開始しなければならない。

最終的に要求は実現に至らなかったが、一人ひとりが意志して実践すればたたかいに向けた原動力になり、JR東労組の未来を切り拓いていくことができると実感した。

私たちはこれからもJR東日本グループで働く仲間の皆さんに対して、JR東労組への結集を呼びかけ、春闘の灯を消させないためにも、労働者であることの自覚をもって、JR総連に結集する全国の仲間と共に、「JR総連春闘」をたたかっていくものである。

2022年3月31日  
東日本旅客鉄道労働組合  
中央執行委員会